



鳥取県教育センターだより

Tottori Prefectural Education Center News

〒680-0941 鳥取市湖山町北5丁目201 【TEL】0857-28-2321（代表）【FAX】0857-28-8513
【URL】http://www.torikyo.ed.jp/kyoiku-c/ 【e-mail】kyoikucen@pref.tottori.lg.jp

『鳥取県教育センターフォーラム2017』開催！

7月13日（木）、『鳥取県教育センターフォーラム2017』を開催しました。平成28年度長期研修やスーパーバイザー派遣事業における研究発表及び記念講演を実施し、学校や教育委員会から多くの皆様に参加いただきました。長期研修の研究発表では、南部町立法勝寺中学校の濱家雄教諭より、プロジェクト学習やルーブリックを活用した協同学習の取組について発表いただきました。また、スーパーバイザー派遣事業からは、鳥取市立岩倉小学校のルールとリレーションを活かした学びづくりについての研究と鳥取市立南中学校のユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善、とりわけ山場を中心とした授業展開に関する研究について発表いただきました。記念講演では、お茶の水女子大学の耳塚寛明教授に「学力格差への挑戦～高い成果をあげている学校の特徴に学ぶ～」と題して、家庭的背景による学力格差の実態や学力格差を克服していくための取組についてお話をさせていただきました。実証的データに裏付けされた耳塚教授の話には、参加者から驚きの声が聞かれるとともに、学校として、教育委員会として今後どうこの問題に取り組んでいくのかを考えるよい機会になりました。



「高い成果を上げている学校」の特徴 ～耳塚教授の講演より～

- ①家庭学習指導（宿題＋自主学習、自学ノートによる指導等）の徹底
- ②管理職のリーダーシップと同僚性の構築、実践的な教員研修
- ③小中連携（授業＝学習スタイルの共通化等）の充実
- ④言語に関する授業規律や学習規律の徹底
- ⑤学力調査の活用（分析、課題の明確化・共有、授業改善等）
- ⑥基礎基本の定着の重視と少人数指導、少人数学級の効果
- ⑦放課後や夏期休業期間中の補習（地域ボランティア等多様な形態）

フォーラム 2017 参加者の感想 より

- どの学校の発表も明確な視点やねらいをもって取り組まれており、大変参考になりました。学校がチームとなり、教職員が同じ方向を視ることで、何かが起こることが実感できました。
- 全校で一丸となって課題を一点突破することで、学校の雰囲気も大きく変えることができることがよく伝わってきました。
- データをもとに学力格差に切り込み、背景や手の打ちどころを示していただきました。学校の果たすべき役割・行政の果たすべき役割は何か考える参考になりました。学校と行政がベクトルを合わせ、めざすべき姿を共有しながら推進していくことが大切だと感じました。

研修情報①

教科・領域指導力向上ゼミナール （小学校算数・中学校数学）より

本年度の教科・領域指導力向上ゼミナールは、小学校が「算数」、中学校が「数学」で、年間5回のシリーズ研修を行っています。第1回目は、国立教育政策研究所より小学校は小松調査官に、中学校は水谷調査官に講義をいただきました。そのなかで下記の2点について紹介します。

I 新学習指導要領がめざす資質・能力の育成

《資質・能力育成への授業改善の根底にあるもの》

「子どもが持っている内なる力を引き出し、
価値付けながら子どもの心に意味づける」

【授業づくりで意識したいこと】

- ◇子どもたちが将来必要とする力を見据えること
- ◇習ったことを活用する機会を設定し、言語活動の充実を図ること
- ◇学習している内容の価値を実感できるようにすること
- ◇「子どもたちにどういった力が身についたか」という学習の成果を的確に捉えること
- ◇習得・活用・探究的な学習を通して最終的に自律できるように考えること

II 全国学力・学習状況調査の分析をととした 授業改善に向けてのポイント

【児童・生徒の学習状況を把握する】

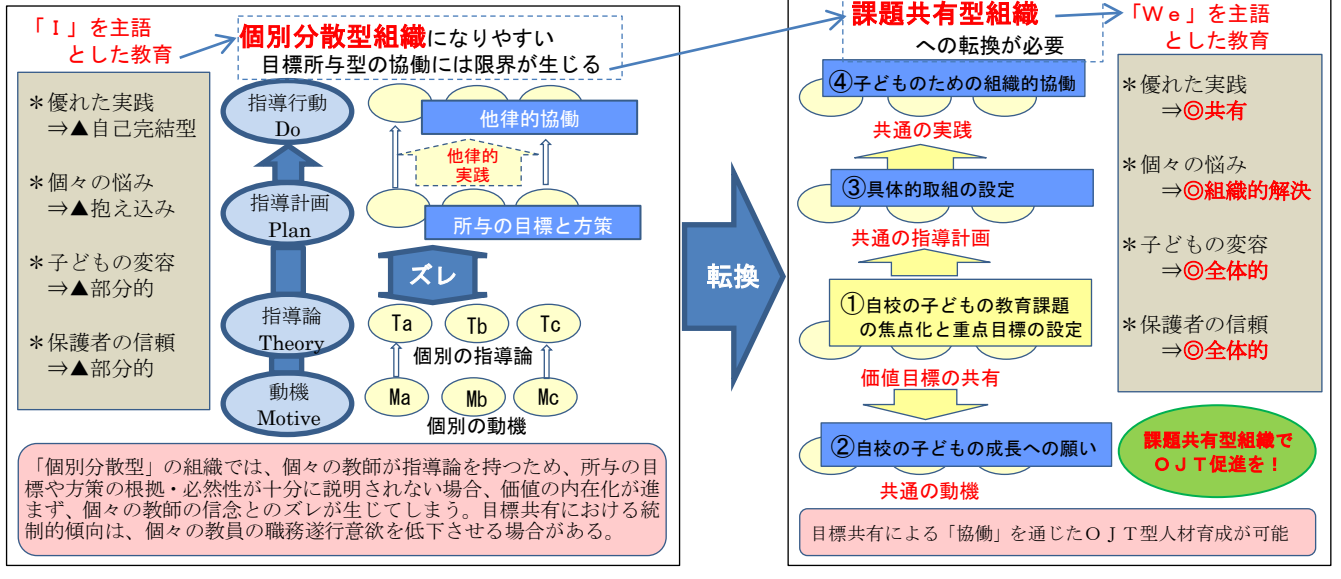
- 表現する機会を増やして情報を収集すること
- 児童・生徒の主体的な活動を設定すること
- 児童・生徒自身で振り返ることができるようにしていくこと
- 誤答を予測し、生かす展開を考えること
- 意図的につまずかせ、乗り越えたときに分かったという実感がもてること
- どんなふう考えたことが良かったのか思考のプロセスを振り返らせること
- 報告書、解説資料に指導方法が明記されているので参考にする

すべての教職員が
心がけたいこと

- * 「カリキュラム・マネジメント」の必要性を理解すること
- * 教育課程全体の中での位置づけを意識しながら日々の授業に取り組むこと

《シリーズ》
OJT 促進に向けて (第2回)

シリーズ2回目の今回は、5月26日(金)に行われた教務主任研修(中学校)より、鳴門教育大学教授の久我直人氏の講義「OJTによる人材育成と教務主任の役割」の一部を紹介します。



研修情報② 専門研修【中・高生徒指導】より
アンガーマネジメントの理論と指導の実際
～感情と上手につき合うために～

渡邊淳一教授(美作大学)の講義の一部を紹介いたします。

アンガーマネジメントとは?

「怒らないこと」ではなく、怒りに関して「後悔しないこと」。怒る必要のあるときは上手に怒り、怒る必要のないことは怒らないようにすること

上手に怒るとは?

他人を傷つせず、自分を傷つせず、モノを壊さず、怒っていることを表現すること

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ※「私」を主語にして伝える (Iメッセージ) ※第1次感情を伝える ※どうしてほしかったのかを伝える ※感情を伝えるためには感情的にならない × 「(あなたは) なんで約束を守れないの」 ○ 「(私は) 約束を守ってもらえなくて悲しかった。守ってほしかった」 | <ul style="list-style-type: none"> ※「なぜ?」で相手を責めない ※人格を否定しない (例。「最低な人」等) ※大げさな表現をしない (例。「みんなが言っている」等) ※主観で決めつけない (例。「やりたくないからでしょ」) |
|--|---|

《受講者の感想より》

- ・感情は抑えるようにと考えていましたが、感情(怒り)と上手につき合い後悔しないマネジメントを実践することで、これから上手にやっていきたいと思いました。
- ・自分の本心を伝えることが意外に難しいことに気づきました。上手な怒り方の実践を繰り返す必要性を感じました。

土曜自主セミナー
「志あるところに道ありき」

「世界をめざす選手の人材育成から、夢に向かって自己実現をめざす児童生徒の指導のあり方を学ぶ」をねらいとして、以下のとおり土曜自主セミナーを開催します。ご参加をお待ちしています。

【講師】山下 佐知子 氏

(第一生命グループ女子陸上部監督)

【日時】平成29年9月2日(土)

13時15分～16時00分

【会場】鳥取県教育センター大研修室

《講師プロフィール》

名古屋国際女子マラソン 優勝

(1991年3月)

世界陸上選手権 銀メダル

(1991年8月)

バルセロナオリンピック

4位入賞 (1992年8月)



遠望近視

眼科の視力回復のことではありません。文部省初等中等教育局長で国立教育会館館長であった西崎清久氏の著書『遠望近視の夢幻』の言葉です。私たち人間は、一度に複数のことをすることは物理的に難しいというのが一般的です。しかし、ものごとを判断したり行ったりする場合にはその逆で、同時に複数の視点で考えるということ(複眼的思考)が求められる場合が少なくありません。「遠くを望みながら、近くを見る」といった私たちに求められている「ものの見方や考え方」を、この「遠望近視」という言葉は端的に言い表しているように思います。

学校における「望遠」とは、子どもたちが大人になった時のそれぞれの姿や、子どもたちが暮らす社会やその地域の未来の姿と考えることができます。それぞれの学校がめざしている教育活動の先には、間違いなくそういった私たちの望む姿が思い描かれており、その方向性の中で各校の教育目標が定められています。ただし、「望遠」だけでは、決して望む姿にたどり着くことはできません。まずは足元をしっかりと見つめるといった、「近視」のプロセスが必要となるからです。たとえば、国や県あるいは市町村の取組を理解する、子どもたちの実態をしっかりと把握する、保護者や地域の願いを謙虚に受け止める、現状の課題を整理し明確にしていく、このような営みこそが「近視」であり、望む姿に到達するための最初の一步、出発点となります。各学校において、この「遠望近視」をしっかりと行うことによって、これから何をどのようにするべきかという具体的なプランやプロセスを、私たちは導き出すことができるのではないのでしょうか。

所長 小林 傳